

## 木造建築の新世紀を迎えて

——もっと木材科学を——

森林総合研究所 研究コーディネーター 林知行先生に聞く

速しました。

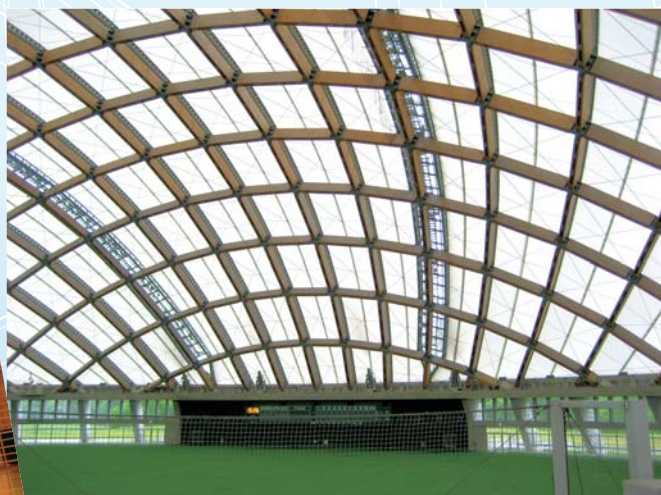
しかし、昭和の終わりころに、いわゆる外圧によって一種の逆流が始まりました。条件付ですが、大きな木造建築を建てるのが法的に可能になったのです。それ以降、20年以上が経過し、木造建築を取り巻く状況は大きく変化してきました。木造の構造設計・施工技術が進化し、法的な整備も進んで、校舎や体育館、公共施設など比較的大規模な木造建築も目につくようになってきました。

利用の促進に関する法律」までもが本年10月に施行されました。流れが「コンクリートから木へ」と逆転したのです。木造建築が新世紀を迎えたといってもよいかもしれません。

とはいえ、木材業界にとってすべてがバラ色ではありません。課題は山積されています。昭和30年代から四半世紀も続いた「木造建築の暗黒時代」の影もまだ尾を引いたままです。

今回の特集では、戦後における木造建築と木質建材

の変遷、現状の分析、新世紀における今後の展開などを、森林総合研究所の林知行先生にお伺いしました。



木の花ドーム（宮崎県宮崎市）

「あなたにとって懐かしの学び舎は？」と聞かれて思い浮かべる校舎は、木造でしょうか。それとも鉄筋コンクリート造でしょうか？子供時代を昭和の前半期に過ごした人と、後半期の人とで、答えは分かれるようです。というのも、昭和30年代から徐々に、校舎は鉄筋コンクリート造一辺倒となり、木造校舎は姿を消していったからです。当時、「木からコンクリー

棄したこともこの流れを加

## 戦後における木造建築と木質建材の歴史

木材と木造建築の現状を分析し、それを将来につなげるためには、過去の経緯、大げさに言えば歴史を知っておく必要があります。図1は「戦後における木造建築と木質建材の変遷」を並列的に表示したものです。

戦後の混乱期を経て生じた、木材利用に関する最大の施策が、昭和30年1月の「木材資源利用合

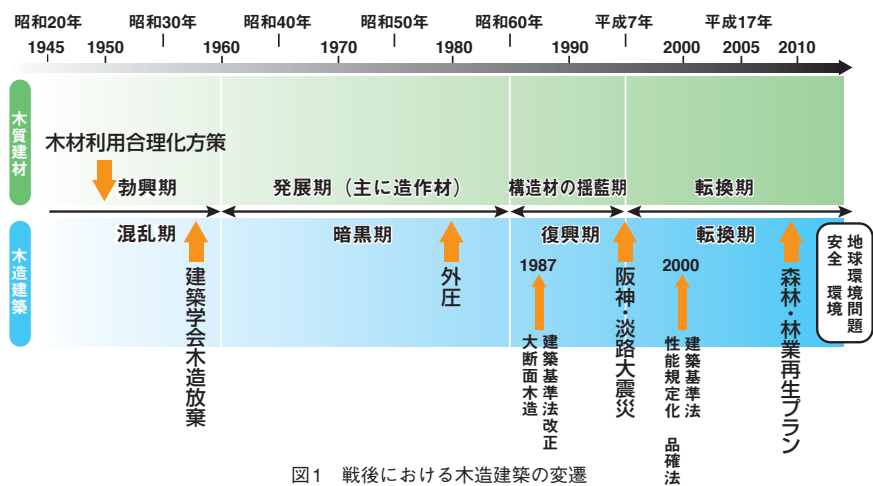


図1 戦後における木造建築の変遷

理化方策」の閣議決定でした。これによって、国を挙げて「木材を使わないようにすること」が行政の大方針となりました。この施策の影響もあってか、昭和34年における建築学会の木造禁止宣言から、木造建築の暗黒時代が始まりました。結局、この暗黒時代がその後四半世紀も続くことになったのですが、この間、木材の構造的利用は厳しく制限され、木造排除・軽視の風潮が建築界全体的主流となっていました。ただ、世の中が高度成長期であったことが幸いして、木造建築業界としては全体的に右肩上がりの状況が続いたのです。

一方、木質建材業界も、このような需要の動向に添って発展を遂げたのですが、その発展方向は化粧・造作材が主でした。この結果、構造材に関しては、北米などの木造先進諸国に比べて大きな遅れをとっていました。

このようないわば「構造材の鎖国状態」にあったわが国に開国を迫ったのが、1980年代における北米からの外圧でした。これを受けて1987年に出された施策が、建築基準法の大改正（大断面木造の解禁）でした。これを機に、大断面構造用集成材をはじめとする様々な構造用木質建材の規格が整備されるとともに、OSBのような新製品がわが国に次々と登場してきました。また、それらを利用した新しい木造建築も次々に建設されるようになったのです。

ところが、このような動きに大きなショックを与えたのが、1995年の阪神淡路大震災でした。この震災をきっかけに、それまで「クサイものに蓋」の状態で楽観視してきた「木材と木造建築に関する数多くの問題」が噴出してしまいました。しかし不幸中の幸いというべきか、これによって木造復興の動きが阻害されることはありませんでした。逆に木造建築の構造に関する研究が加速され、様々な行政的施策が打ち出されました。2000年頃の建築基準法の性能規定化や品確法の登

場などは明らかにこの流れに沿ったものでした。

ちょうどこの頃から国産材の利用が特に大きな問題となってきました。これへの対応策として高速人工乾燥技術の高度化と新たな製品開発（厚物合板や異樹種複合集成材など）が進み、現在では危機的な状況からは脱しつつあるといえるでしょう。

ただ、川上・川中側での問題は山積されたままです。2009年暮れに林野庁から提出された森林・林業再生プランは、この問題の解決策を目玉としたものです。その中でも特に川下対策の切り札として本年の6月に成立したのが「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」です。国産材利用とならんで、21世紀に入った頃からクローズアップされてきたのが、地球環境問題です。木材の有効利用が空気中の二酸化炭素を減少させ、地球温暖化防止の一助となるのが一般に理解されるようになり、さらには木造建築のもつ環境負荷の低さが大きく評価されるようになりました。日本建築学会も、2009年暮れに出した地球温暖化対策2050の中で「木材の積極的利用によって炭素の固定蓄積量を増大させることで、大気中のCO2を削減する。」と表現するまでになりました。木造禁止宣言以来、そっぽを向き続けてきた建築学会が木材利用を推進するようになったのです。これはまさに、画期的な出来事であると言えます。

以上、戦後の変遷を大ざっぱに述べましたが、詳細は「林知行著…ここまで変わった木材・木造建築、丸善（2003）」に書いてあります。ただ、この本は現在絶版になっていて、古本でしか



つくば市立柳橋小学校



入手できません。

いずれにしても、過去にこういう経緯があった現在に至っているのだということを、特に若手の人たちには知っておいてもらいたいと常に思っています。

——先生はこれまで、エンジニアードウッドを紹介、啓蒙する本を多く出されています。

## エンジニアードウッドとは

エンジニアードウッドについて解説せよとおっしゃいますが、もはや私自身はあきらかに近い心境にあります…（笑）。いくら私が「そうじゃないんだ」と叫んでみても、一旦間違った解釈が世の中に広まってしまつと、もはやどうにもならないことが、この十数年間いろいろ啓蒙活動をやつてみて、よく分かりました。

Engineered Woodの本来本元である北米においても、1990年代にはきちんとした用語の使い方がされていましたが、Engineered Flooringなどという奇妙な商品が登場した頃から使い方がおかしくなり、今では全く混乱した状態にあります。わが国ではもっとひどくて、エンジニアリングウッドという和製英語が1990年代に登場してしまつたこともあって、用語の定義がさらに混乱しています。

ここまで解釈が人によって異なつてしまつと、専門用語としてもはや意味をなしません。もちろん、学術用語としては使えません。私としては、出来るだけ早く、この用語を消し去つた方が良いのではないかとさえ思っています。

それを知つてか知らずか、最近では用語としての新奇性が失われてきたこともあって、エンジニアードウッドという用語を耳にすることが少なくなつてきました。この用語が無くても、構造用集成材とかOSBとか、個々の製品の名称がありま

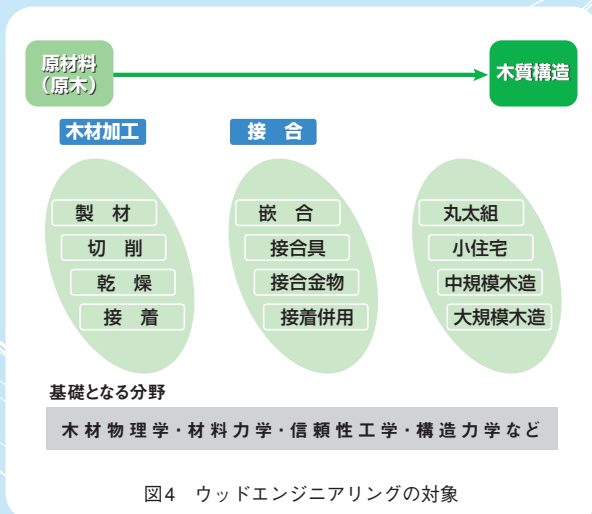


図4 ウッドエンジニアリングの対象

ません。というよりも、それが金属やプラスチックにはない木材の良さでもありますから、昔ながらの一般的な商品知識だけでもそれほど大きな問題にはならないのですが、構造用に関しては、そんな甘いことは言っておられません。

はじめにも言いましたように、ここ十年くらいの間に木造建築に関する設計施工技術はより高度化してきました。また、関連法規もより厳密化してきました。このことはとりもなおさず、構造用の部材となる木材・木質材料の品質管理に対する要求度が非常に高まってきたということでもあるのです。含水率にしても、強度等級にしても、寸法精度にしても、「昔はそんな厳しいことは要求されなかった」とか「木は生きているんだからしょうがない」などと言ってみても、もはやそんな理屈は通用しなくなつてきています。生物材料だから特性のバラツキは仕方がないのですが、それならそれでどれくらいばらつくのかを提示しなければならぬのです。

これは、製材だけではなくて、構造用木質材料

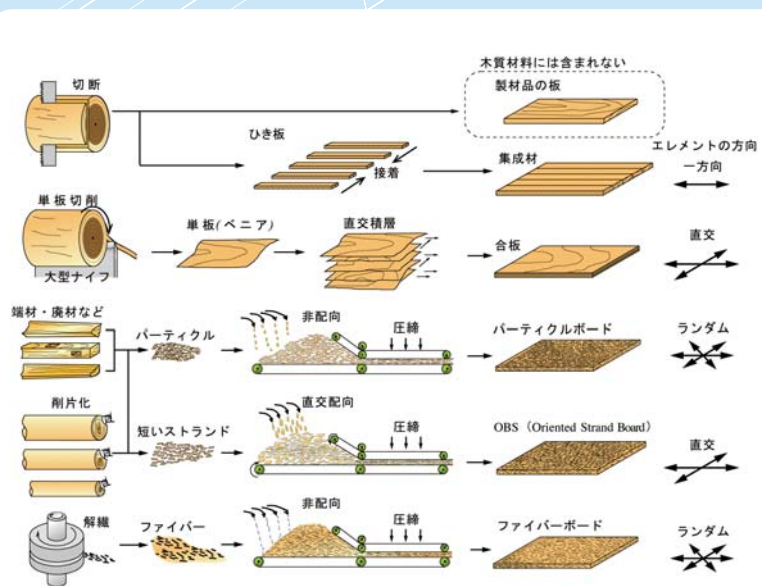


図2 木質材料（軸材）

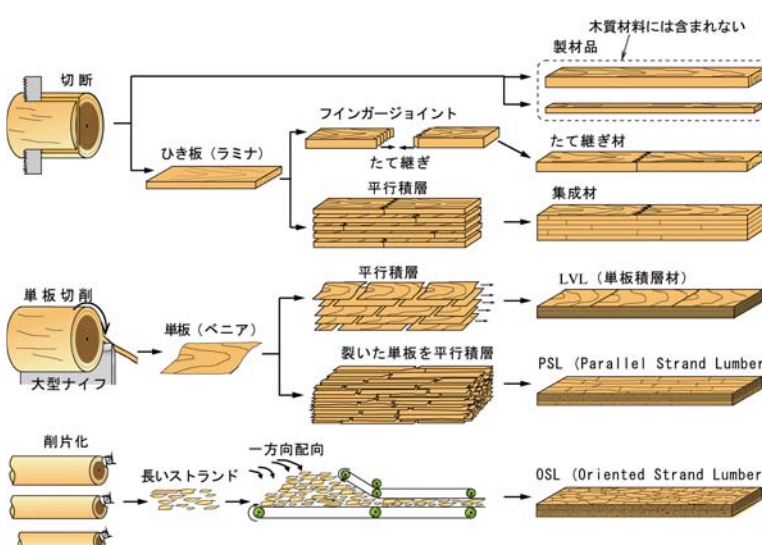


図3 木質材料（面材）

の製造工程を示しておきます。

## ウッドエンジニアリングの重要性

ここまで、木造建築と木質建材の変遷やら、エンジニアードウッドやら、過去の話をしてきましたが、現状の問題点についていえば、やはり木材業界全体において「木材に関する科学・技術」の普及・啓蒙が十分でないということに尽きると思います。

造作用や化粧用に関しては、人間の命に関わることではありませんし、人の好みというか、客観的に数値化できないところで評価が決まつたりするので、曖昧なところがあつても特に問題はない

（し）を1と書いてあるので、図の下の式は全く意味不明です。

図4-2には、奇妙な木目が描かれています。図4-3はトレースミスでしょうが、こんなミスが堂々と教科書に載つてしまうのも、これまた信じられない話です。図4-4は全く意味不明です。

いかがでしょうか、皆さんも呆れかえられたことでしょう。こんな教科書を使って建築士の卵たちが勉強しているのです。これ以外にも多くの教科書では、木質材料には造作用と構造用があると

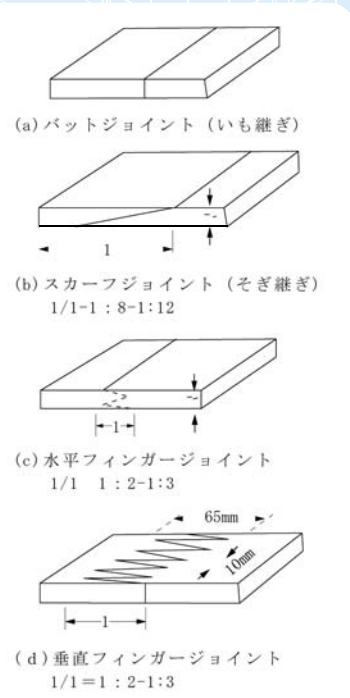


図4-1

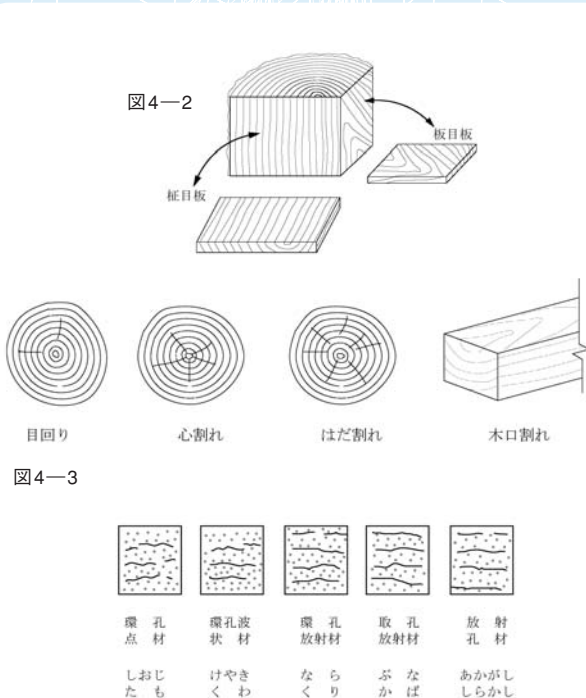


図4-4



いう、最も重要なポイントが書かれてありません。だからこそ、写真2「ちょっと悲しい実例集から」にあるような間違った使用例がいつまで経っても絶えないのです。

なぜこんなひどいことになってしまったのか？まさに木造建築の暗黒期の影響がここに出ているのです。つまり、全国の建築材料学の先生方は、暗黒時代に育っていますので、木材についてまともな教育を受けていないのです。ほとんどの先生方はコンクリートや鉄の専門家ですから、こんなデタラメなことを教科書に書いていても、それが間違っていることにさえ気がつかないのです。造作用と構造用という基本中の基本さえ理解できていないのです。恐ろしいことに、そんな先生方から、こんな教科書を使って教育をされた人たちが一級建築士になっているのです。

誤解されてはいけないので、強調しておきますが、すべての建築士がこんなデタラメ情報を信じていると言っているわけではありません。今この記事を読んでもおられる建築士の方は、木材に対して高い見識をお持ちのはずです。もしそうでなければ、この記事を読むはずがありませんから。

## 今さら人には聞けない 木のはなし

冗談はともかくとして、建築士の木材に関する知識について建築学会の委員会などで議論しているうちに、もっと恐ろしい事実に気がつきました。それは「建築士よりも、木材関係者の知識はどうなのか？」ということでした。

そこで森林総合研究所の若手に「木の年輪幅は南の方が広いというのはガセネタだが、どうしてか？」とか、「樹液の流れるスピードはどれくらいか？」とか、「含水率に乾量基準を使うのはなぜか？」といった質問をぶつけてみたのです。結果は……、惨憺たるものでした。特に木材よ

林保全が機能していない状況があり、木を使うことで森を育て林業再生を図ることも視野に入れています。

住宅ではなくて公共建築物が対象となると、問題になってくるのは、まず、構造用木材の供給が可能かという点です。住宅用なら長さは3mか4m、通し柱でも6mくらいですが、公共建築用となるともっと長いものが必要になります。当然断面も大きくなります。こういった長大な木材をどうやって集めるのが大問題になります。もちろん、構造用集成材等では寸法の問題は少ないのですが、工場がその地方に無ければ、地域材の利用が制限されます。

次の問題点は、品質保証です。公共建築物が対象ですから、保証のない無等級材というのはいかがなものかという議論が出るでしょう。構造用木質材料なら当然JAS製品になりますので、何の問題ありませんが、製材では実態としてJAS製品が少ないですし、人工乾燥も大径材では容易ではありません。

3つめの問題点は、単価が明示できないという点です。コンクリートや鉄なら建設物価を見てもすぐに積算できるのですが、木材ではそうはいきません。積算基準がなければ見積もりが出来ません。

りも樹木に関する質問にはほとんど答えられないという有様でした。それで「これはイカン」と思っ

て書き始めたのが、日刊木材新聞の連載「今さら人には聞けない木のはなし」だったのです。月2回の連載を始めて、半年も経たないうちに、大きな反響が返ってきました。「目からウロコが落ちた」「はじめて理解できた」「あれは面白い」等々、所外の委員会や懇親会などでお会いする業界関係者から、賞賛の言葉を頂きました。また、メールで長文の感想を送ってきてくれた方もい

っしまいました。ここでこの本の内容を全部紹介するわけにはいき

ませんので、評判がよかった話題を挙げると：板目板が反る理由、正倉院の校倉壁は本当に湿度調整をしているのか、木の年輪幅は本当に南側が広いのか、世界最大の木造建築は、ヤング率とは、木材の含水率が一般人の思いつく含水率と異なる理由、“接着”でくっつく理由、樹木は生きているのか、E・F表示って何、木材の収縮率が放射方向と接線方向で異なる理由、なぜ割れがあっても怖くないのか、人は死んだらどうなるのか、辺材と心材の違い、未成熟材とは、樹液の流れる音は聞こえるのか、梁と桁の違い等があります。全般的には樹木に関する話題が多かったように思います。

ともあれ、早く本にしてくれというリクエストもありましたので、連載を50回まで続けた後、本年の7月に日刊木材新聞社から本として出版しました。あくまでも読者サービスという形ですので、一般書店やamazon等での取り扱いはなく、日刊木材新聞社のホームページからしか購入できませんが、それでも3ヶ月経たないうちに増刷となりました。

これらの経験から学んだことは、業界人が特に知っていたのは(1)ユーザーに上手く説明する方法、(2)科学的な根拠、(3)樹のはなしだということです。

これも大問題になります。もちろん、RCに比べて価格が大幅に高くなってしまうようでは相手にしてもらえません。低コスト化も大きな課題です。

これ以外にもいくつか問題はありますが、当面の対応を迫られているのは上の3点でしょう。このような大問題が木材業界側に投げかけられているのです。早急に対応できるようにしないと、せっかく追い風が吹いているのに「帆がたたまれたままで船が動かない」というような情けない状態になってしまふ可能性があります。

## 新たな可能性

ここ10年の間に、国産材の需要開発をターゲットにした大きな3つの技術革新がありました。高速人工乾燥技術の高度化、厚物合板の開発、異樹種複合集成材の開発です。いずれも森林総研が大きく関わってきたもので、これらの開発が自給率の向上に貢献してきたと自負していますが、もちろんこれだけで研究が終わりになるわけではありません。

現在の研究課題のいくつかを紹介しておきたいと思



林知行(はやしともゆき)先生のプロフィール

◎農学博士  
◎独立行政法人森林総合研究所 研究コーディネータ(木質資源利用研究担当)  
■略歴／1982年 京都大学大学院農学研究科博士課程林産工学専攻修了、同年農林水産省林業試験場(現森林総合研究所)入所。集成加工研究室主任研究官、接合研究室長、構造利用研究領域長を経て、2009年より現職。2010年より産学官連携推進調整監を併任。この間、米ヴァージニア州立工科大学客員研究員、東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻連携併任講座助教授を務める。  
■受賞／材料学会論文賞、木材学会賞、杉山秀男賞  
■著書／単著：「ここまで変わった木材・木造建築」(丸善 2003年)、「木の強さを活かす—ウッドエンジニアリング入門」(学芸出版 2004年)「今さら人には聞けない木のはなし」(日刊木材新聞社 2010年)  
編著：「高信頼性木質建材—エンジニアードウッド」(日刊木材新聞社 1998年)  
■現在の諸活動／日本木材学会理事、日本木材加工技術協会常任理事、日本接着学会評議員、森林・木材・環境アカデミー理事、東京大学大学院農学生命科学研究科非常勤講師(生物材料科学専攻[木造建築コース])など。



## よりよい木材利用へ、 新しい追い風

今年6月「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」という法律が出来ました。この法律は、現在木造率が低く今後に需要が期待できる公共建築物の木材利用を国が率先して進めることで、地方自治体や民間事業者もこれにならって、住宅や一般建築の分野まで木材全体の需要を拡大することを狙いとしています。背景には、日本の人工林が資源として利用可能な時期を迎えていること、その一方で、木材価格の低迷などで森

まで成功しています。2時間耐火も十分可能という感触を得られていますので、これが可能となれば、木材の利用範囲が大きく拡がること予想されます。

7階建てくらいまでの中層木質構造は、すでに海外では建てられていますので、わが国でも耐火の問題が解決されれば、構造技術的にはそれほど難しい話ではありません。内装材の難燃化も含めて、耐火関係は大きな技術課題です。

温暖化対応策としてはバイオマス利用を別にして、木材を利用したヒートアイランド防止技術が話題になっています。また、土木関係では、木橋、森林土木、遮音壁、ガードレールのみならず、地盤改良にも利用範囲を拡げようという研究が進んでいます。

いちいち例を挙げていくとキリがないので、これくらいにしておきますが、いずれにしても、技術開発の課題は今後も絶えることはありません。

## おわりに

色々述べましたが、私が言いたいことは簡単です。「木造建築の新世紀を迎えた今、木材業界には、もっと木材科学が必要だ」ということです。



「木の最前線レポート」は、新しい「木」の時代を創出しようとする意欲的な挑戦を、ひろく紹介するコーナーです。今回は、埼玉県飯能市に「き・ま・ま・工・房 木楽里（きらり）」さんを訪ねました。「木楽里」は初めての人でも木製品を自分でつくることができる体験工房です。

# つくる楽しみを通して、木の良さを伝えたい

林業家が主宰する、自由に気ままな木の創造工房

き・ま・ま・工・房  
**木楽里**  
きらり

## 緑の中の「木の学び舎」

西武池袋線「東吾野」駅を降り、国道299号線を秩父方面へ歩いて15分。「き・ま・ま・工・房 木楽里（きらり）」の大きな看板が見えてきました。工房は無垢のスギ、ヒノキを使った伝統的軸組構法の建物。井桁状の小屋組みに白壁が鮮やかで、切妻屋根に天窓を兼ねた二つの架構が斬新な印象を与えます。工房の前は広い駐車場で、道をはさんで高麗川が流れています。「木楽里」は山と川に囲まれた環境の中にありました。

入り口は「木楽里」のオリジナル木製品の展示スペース。右側の部屋には、大きな作業卓が4台あり、ここが体験工房です。奥の部屋は大型の木工機械を設えた「木楽里」の制作室になっています。室内は天窓からの自然光であ

ふれています。天井を見上げると、天窓の二つの架構の小屋組みが見えて、さながら無垢材の展示スペースの感があります。

スタッフは、工房マスターの井上淳治さん通称「とつとつあん」、オリジナル製品製作担当の荒井なつみさん「なつち」、木工情報担当の小崎尚美さん「こなみちち」。それに、工房の飼い猫くりーぶ「くりちゃん」の三人と一匹。

工房マスターの井上さんは林業家でもあります。工房建物は、すべて井上さんの自家材で建てられました。井上さんにお話をいただきました。

—この工房を始められたきっかけは？

## 若手林業家としての出発

大学卒業後、やり残したことがあるような気がして研究室に1年残りました。その後、先生に紹介してもらって奈良県桜井市の製材工場で製材見習いを経験しました。無給でしたが食事付の居候で、よく置いてくれたものだと思います。ここで、製材の手伝いをしたり原木市場や製品市場へ行ったり。林学を専攻したなんていっても木材のことは何も分かっていないのも当然でしたから、じつに勉強になりました。なので、材木屋の専門用語を覚えたのは関西。おかげで材木屋言葉を話すときは、今でも関西風のイントネーションになっています。（笑）

25年前、家業を継ぐためここに戻りました。当時は林業不況で、若い

れも多いのは意外でした。

何をつくらうと決めて来る方もいれば、考えは別に持たずに来る方もいます。スタッフのフォロワーは、ご本人がどのレベルを目指しているかに応じて、どの程度手を差し伸べるかを判断しています。例えばお子さんの夏休みの宿題なら、ただ見守るだけです。自分がどの程度努力したかということがポイントですから。なかにはお父さんだけが作っている宿題もあったりします（笑）。

親子連れではお母さんが夢中になるケースがとても多い。お父さんお母さんが頑張っていると子供たちは

とても元気です。木工指導のボイントは、まず「声かけ」、そして本人の感性にどう訴えかけられるか、にあります。

自分で工夫して思うままにつくる、ということがどうしても苦手な人もいます。見本を物差しで計って釘を打つような人もいます。選択は得意でも創造は出来ない、という人が若い人に多い気がします。自由にイマジネーションを膨らまして作る。失敗したらやり直せばいいんです。ここは、そのための気ままな工房なのですから…。

—林業家が主宰する体験工房として、めざすものは？

## 「木の良さを伝える」一粒の麦として

今の暮らしには、木と触れ合うシーンがあまりに少ない。もっと自由気ままに木に触れ、木と遊んで、木の良さを知ってもらいたい。この工房はそのためにあります。

木育インストラクターの講習などで思うのは、材料に木を使いさえすれば、あるいは道具の使い方を教えればそれでいい、というものではないということです。木っ

端を置いて子供たちに勝手に遊ばせるというようなことで、木の良さは伝わりません。木を使って、あれができる、



「木楽里」のロゴ入りキャップ。ロゴは井上さんの友人による制作。

—「木楽里」にはどんな方が多く来られて、どんなフォローをされるんでしょう？

## 気ままに自由なイマジネーションを育む

最初は倉庫の一部を改装して日曜大工的な感覚で始めていたのですが、設計士の吉野勲さんに工房の構想イメージを伝えて描いてもらった図面がありました。それを見て背中を押してくれたのが父です。「どうせやるならきっちり本格的にやってはどうか」と言ってくれて、思い切って自家材を使ってこの工房を建てました。不安はもちろんありましたが、林業は駄目で、どうせ先の見通しがないと言われていたのなら、やりたいただけやって駄目になった方がいいかと…（笑）。

当初は、リタイヤしたお父さんたちの会員の趣味の会から拡げたいこうなどと構想していたのですが、ふたを開けてみたら世代は全般、しかも30代の男女の皆さん、ご家族連

### 井上淳治氏—プロフィール

- 1982年東京農業大学農学部林学科卒業後、同大学造林学研究室研究生。
- その後、奈良県桜井市の製材工場見習いを経て1984年4月から家業（（有）創林）に従事。
- 1997年「きまま工房 木楽里」を開設。
- 現在、全国林業研究グループ連絡協議会副会長／埼玉県森林協会副会長（林業研究部会副会長）／NPO法人西川・森の市場代表理事







工房の玄関で皆さんに勢ぞろいしていただきました。右から二人目が、製品製作担当の荒井なつみさん。右端は、前のスタッフの鴨下さん。今は子育てで一時休業中。中央がお子さん、左端が奥様。



NPO 法人森の市場のイベント案内チラシ。「木楽里」でも工房に集まる人とのたくさんのイベントが催されています。



#### ◆「き・ま・ま・工・房 木楽里 (きらり)」

〒357-0212 埼玉県飯能市井上138番地  
Tel.042-970-2007 Fax.042-970-2008  
E-mail kirari@k-kirari.co.jp URL = <http://www.k-kirari.co.jp>  
木楽里のホームページでは、工房に参加された皆さんの作品やイベント情報を見ることができます。

#### ◆「NPO 法人 森の市場」

URL = <http://www.morinoichiba.net>



飯能駅西口ロータリーに置かれていた木馬のオブジェ。傷んできたので改作中。新しくなったオブジェが今度ロータリーにお目見えするのは来年3月の予定。  
西川材に関わる林業、木材業の振興には、行政ばかりでなく商工会議所や商店街も力を入れています。夢馬 (Mu-Ma) はそのシンボル。

これでもできるということ、技術的心得とアットな感性とを備えたスタッフがフォローして初めて木の良さは伝えられる。それにさらに「いい材料」を加えたい。スタッフと良質の木材、これが「木楽里」の信念です。

木の良いことを知った次の世代が生まれてくれるなら安い買い物でしょう。(※埼玉大学教育学部 技術教育講座 教授)

「西川材」とは、かつて江戸の材木屋がつけた呼び名です。西から(荒)川を下って千住、木場まで運ばれた。安定的な供給材として重宝されました。「西川林業地」という呼称は昭和の初め頃からです。これだけ歴史ある林業地で、消費地も近いという条件を活かかねば林業経営者と言えない。

近年は、大手の住宅メーカーさんも西川材を指定していただくようになってきました。しかし、メーカーと材の提供者の間で、木材についての考えにずれ違いもあります。メーカーは品質保証の問題があつてどう

しても同品質同規格大量ロットに傾きがちですが、西川材は多品種多品目少ロットで、これを適材適所で使いきるノウハウが欠かせません。

2008年、西川材に関わる森林所有者や工務店、住宅業者でつくるNPO法人「西川・森の市場」を立ち上げました。木の家を建てたいと望む方の相談窓口です。一個人や工務店ではできない限界を超えようという試みです。

西川材も成熟し出荷時期を迎えつつあります。CO2吸収源として人エ林の役割が評価されて、間伐作業に行政から種々の助成金が出るようになりました。しかし間伐助成は、適正価格による流通を保証し山を維持するシステムの確立とはいえませんが。木を知る建築士はまだ少なく、



通称「とっつあん」こと工房マスター井上淳治さん。静かなお話ぶりの方です。

そのためには建築士試験や大学のカリキュラムも変えていく必要があります。無垢材による建築保証を支える行政側のシステムも必要になります。まだまだ多方面で努力が必要です。

「木楽里」は「木の良さを伝える」一粒の麦です。この一粒が沃野に広がっていくことが、私の願いですね。



工房入り口の展示コーナー。ここには、「木楽里」のオリジナル木製品の他、工房を知る人から依頼された作品も置かれています。



作品のスマートボール盤で遊ぶ。



作業室に自然光を取り入れる天窓の架構を下から望む。(表紙写真参照)



「木楽里」一番人気のオリジナルのスギ製ペーパーホルダー。木製ならではの温かみ。欲しくなりました。



箸置き。揃い物なので飲食店の方から意外な人気の商品。



# 新木場にて 日本刀の 技と美を語る

名倉敬世氏（愛三木材株式会社 会長）



飄々としたお話ぶりの名倉敬世氏

「木と合板」も創刊から今号で11号になりました。これまで「木のまち 新木場」を拠点にする会社、企業、スポットを紹介してきた「新木場漫歩」のコーナーも、節目となる11回。今回は、少しこれまでと趣向を変えて、人物探訪編です。

今回は、愛三木材株式会社の会長で東京木材問屋協同組合副理事長でもある名倉敬世氏を、新木場三丁目の会社オフィスにお訪ねしました。名倉氏は、日本刀の収集家、鑑定家としても知られます。テレビ東京の人気番組「開運！なんでも鑑定団」に「迷刀」を持って出演された経歴もお持ちです。

♪ 一家に一本  
日本刀 ♪  
スカッーと爽やか  
日本刀  
って??  
教えてください、  
名倉さん

「東京木材問屋協同組合」のホームページに「文苑」というコーナーがあります。会員の皆さんが寄せる随想、短歌、詩、俳句をアップロードした読み物コーナーです。「随想」をクリックすると現れるのが、「日本人教養講座『日本刀』」というコンテンツ。愛三木材株式会社会長の名倉敬世氏が書き続けるシリーズです。サブタイトルに、「♪ 一家に一本 日本刀 スカッーと爽やか日本刀♪」。これって、じゅうぶん変な感じですよ。特に♪の辺り…。その講座をちよつとだけ読んでみましょう。

ご家庭でも美術館でも結構ですが、皆様の目の前に、一本の刀が有ると致しましょう。先ず、1. これは本当に斬れるか。2. なんぼ位すんだべろか。を考える前に別記の図解をチラッとでも思い出して頂ければ、その時点で「日本文化」に入門です。：（其の21 入門編「冒頭」）

「日本刀」を見る場合は、コワ〜イとかオッソロシイとか云う気持ちを持ててください。あくまで何の先入観も持たず、平常心で日本の「美」としてシンプルに眺めて頂きます。その「無心、無垢の心」が入門の大切な第一歩であります。……（其の22「より」）

軽快な語り口、頻発する駄洒落やギャグ。どんなお人なのか、まずは人物探訪編の初回です。

## 木の良し悪しなんて、担げばわかるさ

### 修業時代

へえ、人物探訪？俺はよしといった方がいいと思うよ。相当にズレれているから。

日本刀をはじめたきっかけ？

戦前の話になるけど、子供の頃、深川の家の床の間にね、日本刀が一振り、鎮座していたんだよ。中学、高校とそれ見ながら育ったけど、当時はこれっぽっちも関心がなかった。

大学卒業して秋田に修業に行つてね。本場の問屋には、江戸の頃から角屋、板屋とそれぞれ専門にする問屋があった。日本三大大美林の木曾ヒノキ、秋田スギ、青森ヒバ。木曾ヒノキは軸材でも板材でも和風建築のオールマイティなんだが、秋田スギは柱とかの軸材には向いてない、板材なんだね。青森ヒバは水に強いてんで土台に使う。ウチは代々、秋田スギだったから秋田の山元に修業に行くわけ。問屋と山元とは親戚みたいなつきあいだ、そうでなくっちゃやっていけない。製材所の親方の家に泊めてもらって、旅館なんぞには泊まらない。親方の中でも、酒の呑めないところを探して世話になる。呑めるか聞かれて「ええ多少は…」なんて言おうもんなら、なにしろ酒の本場だから、半端じゃなく八割がた殺されてしまう（笑）。

まあ、そんな修業をすれば、木の良し悪しからその値段まで、肩に担げば重さ

で分かるようになるんだな。そのうちいっぺんに三束も担げるようになって…。材木屋やるには肩さえありゃいい、首から上なんざなくたっていいなんて言つてね。そんなことは朝飯前だ。それが今じゃ、通じないんだね。何やってんだって言いたくもなっちゃう。

問屋と小売は互いに義理を立てあう関係でね。素人から問屋に在庫の問い合わせがあつても、問屋は必ず小売屋を紹介する。代わりに問屋は品を欠かすことは絶対しない。欠かしたら格好が悪い。恥だなんて言つてね。その頃はそういう不文律があった。災害や台風があると次の日には、問屋の番頭連中が仕入先に走る、ということは上野駅に集まるんだよ。そこが問屋の勝負どころだった。

（壁の肖像写真を振り返って）これが親父なんだけど。親父は兵役では騎兵だった。騎兵つてのは日露戦争の頃までは、コサックとやりあつたりしてたんだが、近代軍隊では斥候とか伝令ぐらいしか役目がなくなつてしまった。その後、日本の騎兵はノモンハン※で

※ノモンハン  
ノモンハン事件（ノモンハン戦争）。昭和14年（1939）年5月から9月にかけて、モンゴル人民共和国と満州国との間で発生した国境線をめぐる紛争。日ソ両軍の衝突となり、日本軍は壊滅的な敗北を喫したと言われている。「ノモンハン事件」は日本側の呼称、ソ連は「ハルハ河の事件」、モンゴルは「ハルハ河戦争」と呼んでいる。

全滅しちゃったんだね。軍隊組織つてのは変なもんでね、原隊がなくなると行き場がない。それで除隊になった。甲種合格で佐長勤務で除隊したのは、本場の番頭連中でも何百人に一人なんて言つてエバつていた。もう戦争行かないんですかって聞かれて、行くところがねえんだなんて。それで何やったかつて言うのと在郷軍人会の会長。この仕事というのが、出征兵士の送り役。それがしばらく経つと、戦地から帰ってくる白木の箱の受け取り役。箱はほとんど空っぽ。それを遺族へ渡しに行くのは辛かったつて言つたよ。

その頃、材木屋は儲かつてた。上野のアメ横なんかで、天井から竹籠ぶら下げて、札や金を入れて商売してるでしょう。それと同じことが、本場の材木屋でも続いてたんだよ。

昭和20年3月10日の東京大空襲の前の晩、親父は疎開先の愛知に行くんで東海道線に乗つてたのが、その日のうちにゲートル

も解かずに、また東京行きに乗り換えて戻ってきた。もう焼け野原でね、東京駅から錦糸町の駅が見えたらし



愛三木材株式会社社屋



刀を見て、その銘、時代、流派を言い当てる〇〇刀剣会の鑑定入札用紙。鑑定歴何年という人でもなかなかクリアできない難問だが、これは満点をとった名倉氏の入札用紙。



先代、名倉栄一氏。敬世氏のご父君。





来国行作の太刀を見せてもらう。



現存する国宝、庖丁正宗の3口。

## 斬れりや、いいってもんじゃないんだ ——日本刀の魅力——

木はありさえすれば売れた。

戦後の親父は江東区の体育協会の会長をやった。42ぐらいの競技団体があつたかな。教育委員もやってた。「これからの日本は若い人たちが担うんだから」なんて言つて飛び回つていた。土曜日曜も出ずっぱりで、どつかで演説ぶつて、みつともねえなあなんて思つてた。商売なんかそつちのけでね。おかげでこつちは苦労したよ。(笑)

おつと？何の話だっけ？そうか、刀の話ね。  
で、秋田の製材所の専務が刀が好き

つて言うんで、「そういえばウチにも刀があつたな」つて話になつてね。一度送つて見せてくれたつていうから送つたんだよ。それから1年も経つたかな、忘れた頃に材木積んだトラックに刀が載つてウチに届いた。抜いてみると、これが前に送つたもんとはとても思えない。こりや、違うよつて言つたが、すつかり研ぎ直されて戻つてきた。へえ、これがあの錆びてた刀かつて。それからですよ。刀に興味を持ちはじめたのは。

んですよ。でも斬れりやいいつもんじゃない。刀を知るには、やつぱり本を読んでだね、それなりの基礎知識を身につけてでないと滑つちゃうね。  
恵美押勝(えみのおしかつ)の乱(725年)あたりからかな、この頃から日本産の刀が出回るようになるんだね。その前から武器はあつたけど、日本産の刀とは言えない。正倉院宝物殿に残つてる直刀は日本のものじゃないんだね。砂鉄から玉鋼に仕上げ、段々に鍛えていく技術が、日本刀最大の特徴。起源は、大和族のササノオノミコトに出雲の海人族が減ぼされたときされる出雲にあつたタタラ。ヤマタノオロチの原点。「もののけ姫」に鉄を吹く場面があつたでしょ、あれがタタラ、鉄を作るところ。刀鍛冶は高熱を使うか

ら、同じく窯を使う焼物の産地と符号するんだな。備前、美濃、山城、信楽：みんな刀の名工のいたところになつていく。  
この頃から、刀に反りが現れるようになって、日本刀の特徴が出てくる。(長刀を鞘から抜いて)これが来国行(らくこくぎ)作といわれる太刀。国行は鎌倉時代の五指に入る刀工でね。これで二尺五寸。腰に吊るして使う。刀身が長いのは、馬上で使うから。抜いて、振り上げ、そして払うというツーステップで振り回すには重いものは不向きなんで、反りがあつて細身になつてたろう。  
室町末期には戦乱が続いて、地上の集団戦が主流になつてきて、いよいよ刀の時代が始まる。「刀は虎徹(こてつ)」とよく言われるけど、これは長曾弥虎徹(ながそねこてつ)の師匠で、美濃の和泉守兼定(いずみのかみさだ)の作。長すぎると地上戦では使いにくい。二尺三寸は、当時の日本人の平均身長から出てきた刀身の寸法。刀身は太刀よりも肉厚で太く、地上戦用に頑丈になつていく。  
ちなみに、一尺までが短刀、一尺から二尺までが脇差、二尺から二尺三寸までが刀、二尺五寸から八寸までが太刀。  
刀はこのころから、一枚の鋼から鍛える丸鍛えではなくて、刃をはさんだ三枚鋼を沸かし継いで鍛えるようになって、刀はより強靱さと美しさが増し

てくる。刃紋にも精妙な美しさが現れてくるようになってくるんだな。  
(図鑑の写真を示しながら)これが

国宝の「庖丁正宗」で、現存してるのはこの3口だけだが、3口とも寸分違わない。「沸の妙味」といわれている。単純に鍛えれば鍛えるほどにいいという訳でもない。その鍛え方が名人の名人たるゆえんでね。火に通したときの炎の色具合で按配を見ろというんだが。刀工が、昔から今でもこの正宗を手本に挑んできたけど、この真似は未だに誰にも出来ていないんだよ。

今じゃ、刀は斬れる斬れないというよりも、美しさを見るものなんだな。鞘におさまっている刀身は、鞘には一切触れずに完全に宙に浮くように精巧にしつらえてある。だから、日本刀は錆びないようになつて。こんな細心の技術は日本以外では見られない。刀身だけじゃなく、鐔にせよ、柄にせよ、鞘にせよ、名刀と呼ばれるものには、沢山の技が込められててね、技と美しさの結晶なんだ、日本刀の魅力は。ようやく近頃、海外からも美術品としての日本刀が注目されるようになってきたね。

\* \*  
そうぞ、せんだつて北海道で全木連(全国木材組合連合会)の大会があつたんで行つてきたんだが、10月から公共建築物木材利用促進法が施行になつた。これまでせいぜい20%どまりだった国

## やつと日が差し始めてきた ——国産材のこれから課題——

産材需要を50%に引き上げるつてことだけど、やつと国産材に目が向く時代になつたといえるかもしれない。この十年間ぐらいで環境重視や、本物志向が趨勢になつてきたこともあるだろうし、民主党政権になつたからということもいえるかも知れないが、とにかく急激な変化だね。この変化に、国産材が対応できるか、これからしばらくが大変だ。

伐採、搬出、製材、出荷：、どれをとつたつて、今はそんな体制になつて

ないからね。何せこれまで外材にばかり依存しておいて、山元から何からが、さんざ日干しになつてたんだから。手のひら返したような変化つてのは、こんなことを言うんだろう。

国産材に目が向くようになってきたのは、いいことには違いない。やつと、日が差し始めてきたつてところかな、頑張らないと。  
え、刀の話？材木屋なんだから、このぐらいのことは言つておかねえとね。



二尺三寸の和泉守兼定の作。



《後記》

日本刀にまつわる歴史上の秘話や逸話、テレビ番組「開運！なんでも鑑定団」の裏話、新木場の埋立地となる以前の由来など、飄々としたお話ぶりに面白おかしく引き込まれ、あつという間に時間がたつてしまいました。つい、お年を聞かず仕舞いでしたが、かつて新木場が葦の原だった頃をご存じで、子供時代はよくハゼ釣りをなさつていたそうです。

見せていただいた日本刀には、思わず息を呑みました。美術品はなるほど、実際に目に触れてこそ語るに値するものと思つたしだいです。  
帰りがけ雨が降つていたので、私たちは名倉さん、栗田さんの2台の車で送つていただきました。「親父さんですか？とにかく義理と人情の人ですよ。ここにお世話になつてもう35年になります、ここまでこれたのも親父さんのおかげです。」車中で聞いた専務の栗田さんのお話でした。

(博物館チーフプロデューサー

赤石和義





## 館内探訪

# Q&A

Vol.11 「材面」

博物館の展示品についてのさまざまな疑問に答えます。第11回は「材面」について解説します。

### Q1 なぜ樹を見るとなごむのでしょうか？

A ヒトが出現する以前に存在し、ヒトの出現につながった動物の脳には視覚を通して植えつけられた樹があり、このため私たちは樹の存在を居心地の良い自然の中と感ずるようになったと考えられます。

### Q2 木材も見ているとなごみますが、それはなぜですか？

A 木材の木目のパターンが持つ、「細胞構造が形成するミクロの凹凸による、光の反射」や「紫外線吸収が大きい暖色系の色相」などの特徴が、「自然に見える」からです。

### Q3 木材の色彩についても教えてください。

A ほとんどが暖色系の黄色や赤色の色相で、コントラストも小さい、落ち着いた暖かいイメージを与えるようなものが多く、派手なイメージのものは少ないです。シマコクタンやゼブラウッドのように、コントラストの大きい派手な樹種も、まれにあります。



ゼブラウッド



(ありさ)

### Q4 木目とはどういうものですか？

A 材面に現れる模様のこと、年輪構造(早材・晩材)や道管などの配列によって形作られるものです。年輪に対して直角に切り出した「柾目」や、平行に切り出した「板目」、その中間の「追柾」があり、それぞれ木目が違ってきます。



センノキ (柾目)



ホワイトアッシュ (板目)

### Q5 木理 (もくり) とはどういうものですか？

A 木材中での細胞の並び方や配列を表す言葉です。樹幹方向の細胞の軸が、樹幹軸と平行になっているものを通直木理といい、そうでないものを交走木理と呼びます。交走木理には、らせん木理、交錯木理、波状木理があります。斜走木理は製材の段階で材軸に対して斜めになった場合です。

### Q6 肌目とはなんですか？

A 材面を視覚的に表現した言葉です。広葉樹材では道管径が大きい場合を、針葉樹材では早材から晩材への移行が急な場合を「粗」とであるといえます。逆の場合を「精」とあるといえます。スギ、マツ、カラマツ、ダグラスファーなど、また多くの環孔材は「粗」です。それに対して、針葉樹材のカヤ、トウヒ、ヒノキ、広葉樹材のカバ、ブナ、カエデなどは「精」です。

### Q7 空 (もく) という言葉を聞いたことがあるのですが？

A 木理やその他の理由で材面に紋様が現れ、それが工芸的な価値をもつ場合に「空」と呼びます。玉空、鳥眼空、リボン空、虎斑などがあり、装飾性が高いことから、和風建築の各所に用いられたり、指物や楽器の素材として利用されています。



### 木材・合板博物館のご案内

**アクセス** 東京メトロ有楽町線 新木場駅 →より徒歩7分  
JR京葉線 新木場駅  
東京りんかい高速鉄道 新木場駅  
東京メトロ東西線 東陽町駅 →よりバス  
②のりば/木11甲・木11折返  
新木場一丁目バス停 より徒歩1分

**開館時間** 午前10:00より午後5:00まで (入館は閉館30分前まで) 入館無料

**休館日** 月曜日、火曜日、祝日 年末年始

\*都合により開館日・時間を変更することがあります  
\*幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。  
\*団体での見学は事前にお申し込みください。



表紙: 「き・ま・ま・工・房 木楽里」の天窓架構の小屋組みを下から望む

木と合板 第11号 2010年11月1日発行 定価:525円(消費税込)

発行: 特定非営利活動法人 木材・合板博物館

〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号 (新木場タワー)

TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール: info@woodmuseum.jp

編集: 「木と合板」編集委員会

制作: 株式会社デジタルアート

特定非営利活動法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板

で

検索

クリック!!